

# 弥彦村商工会と新潟経営大学の連携による 弥彦村の資源調査に関する研究

村のインバウンド観光促進に向けた戦略を中心に

ブレンディ バロリ

## はじめに

現在、観光を取り巻く状況としては、地域への外国人観光客が増加している中、その地域における観光振興において外国人観光客に対するその地域の観光資源、観光施設、観光名所の案内や説明等が課題となっている。そこで、弥彦村の観光振興のため、観光資源の再発見のため現地調査を実施し、評価を行い、今後の観光振興事業の参考とするため弥彦村商工会総会へ発表した。

本研究は、“大学と連携したマーケティング調査・村内周辺市町村在住外国人によるマーケティング調査業務：弥彦村商工会と新潟経営大学が連携し、弥彦村のインバウンド観光促進に向けた現地調査”の弥彦村商工会から2017年度伴走型小規模事業者支援推進事業の依頼を受けた補助事業である。

Keywords：観光資源、観光振興、村の活性化、インバウンド観光

## I. 弥彦村について

### 1. 弥彦村の概要

弥彦村は、新潟県のほぼ中央部の日本海側に位置し、西は霊峰弥彦山（634m）を隔てて新潟市・長岡市と接し、東南は燕市、北は新潟市とそれぞれ肥沃な穀倉地帯を隔てて隣接している。古く神代（かみよ）の時代、天照大神（あまてらすおのみかみ）の曾孫の天香山命（あめのかごやまのみこと）が、日本海を渡り、弥彦山西側にあたる野積海岸（現長岡市）に上陸され、住民に海水から塩を作る方法や、網や釣針を使った漁法を教え、その後この弥彦の地に鎮座され、農耕技術など様々な産業の基礎を授けたと伝えられている<sup>1</sup>。面積は25.17km<sup>2</sup>と人口は8,209人の小さ

な村である<sup>2</sup>。

村の産業は、農業が中心であり、高度経済成長当時、企業誘致による、鉄鋼、弱電の進出、農業の副業として発生した燕市中心の洋食器などの下請け工場の伸びなど、産業構造は大きく変化したが農業が本村の基幹産業に変わりなく、稲作を軸としながらも、生産基盤、土地基盤整備を組み合わせた複合営農の推進、特に特産品である「枝豆」を中心に生産性の高い都市近郊型農業を図っている<sup>3</sup>。また、観光産業として越後一の宮「彌彦神社」を中心とした史跡、弥彦山に代表される自然環境や温泉等に恵まれ、国内唯一の村営競輪場を有し、さらに高速交通体系の整備、余暇時間の増大、並びにモータリゼーションの発展などがあいまって、通年での一定の集客がある。観光、レクリエーションの需要の増大が予想される中で広域観光ルートの確立を図るとともに、歴史文化・緑と自然環境の整った弥彦の魅力セールスポイントとしながら、広域観光を推進している<sup>4</sup>。

## 2. 弥彦村の2015年総合戦略計画と2021年3月の弥彦村第6次総合計画の概要

2015年10月の弥彦村総合戦略計画に「生まれ変わる弥彦村」に向けては、村の良い点（村民の村に対する誇り、彌彦神社等の地域資源等）を活かしながら、人口減少抑制に向けて改善すべき点（産業活性化等）を重点的に取り組む。具体的には「弥彦村塾」により、村民と専門家等が連携して弥彦村の歴史教育や農業・飲食業・宿泊業・観光業、子育て相談等のノウハウを共有することで、村の良いところを伸ばしながらも課題とされている産業の活性化を図り、弥彦村の生活と産業をソフト面から全面的にバックアップする<sup>5</sup>。

また、「産業（農業、観光）」分野での取り組みを重点的に推進し、安定的な雇用創出や出産・子育てにおける経済基盤の確保を図る。併せて、「生活（子育て、定住）」分野での取り組みを推進することで、村民に加え、新たに転居する方にも住みやすい場を提供する。これらが、相互に機能することで中長期的な人口減少を抑制することに結びつけると述べている<sup>6</sup>。

さらに、同計画の第3章3.1 弥彦村塾の役割～「生まれ変わる弥彦村」の実現

<sup>1</sup> 弥彦村ホームページ、<https://www.vill.yahiko.niigata.jp/about/>、2022年5月25日閲覧

<sup>2</sup> 地方創生図鑑、新潟県弥彦村 | 地方創生図鑑 (chihouseisei-zukan.go.jp)、2022年5月26日閲覧

<sup>3</sup> 弥彦村ホームページ、<https://www.vill.yahiko.niigata.jp/about/>、2022年5月25日閲覧

<sup>4</sup> 同上。

<sup>5</sup> 2015年10月の弥彦村総合戦略、5頁より引用

<sup>6</sup> 同上の6頁より引用

に向けて～、3.2に4つのキーワード（農業、観光、子育て、定住）による総合戦略の推進と記載されている<sup>7</sup>。総合戦略の策定に当たっては、将来に向けて世代を超え、持続可能な視点を持ち続けることが必要であり、それを村民が共有し続けることが必要不可欠である。総合戦略において、「農業」「観光」「子育て」「定住」の4つのキーワードの具体的な施策や事業を効果的に推進するためには、以下に示すような“新しい流れ”に着目することにより、そのための環境整備が必要である<sup>8</sup>。

## 基本目標 2 弥彦村の資源を活用した観光の推進

近年の観光入込客数は減少傾向ですが、彌彦神社の観光入込客数は県内で4番目に多いことから、観光地としてのポテンシャルは非常に高いと考えられる。彌彦神社や村営競輪場を中心とした観光資源を活用し、観光入込客数の維持・向上、さらには東京オリンピックを見据えたインバウンド強化を目指す。さらに、多くの観光客に対応出来るよう受け入れの体制強化と、関連産業育成により安定的な雇用創出を目指す。また、出雲崎町・粟島浦村や近隣市町村との連携や農業体験イベント等の観光事業と連携により、観光地としての魅力の幅を広げ、弥彦ファンの増加を目指す<sup>9</sup>と一般的な推進取り組みである。

さらに、2021年3月に、弥彦村第6次総合計画、－個性をみがいてかがやく弥彦村－第3部 行動計画、第1章 基本計画、基本目標4 産業の振興、第2節 観光の振興、1項 宿泊に繋げるための観光入込客数の増加を策定している<sup>10</sup>。

そこで、1項 宿泊に繋げるための観光入込客数の増加に関する以下の取り組みを行う。

弥彦温泉旅館の宿泊客数は減少傾向にある（表1）。

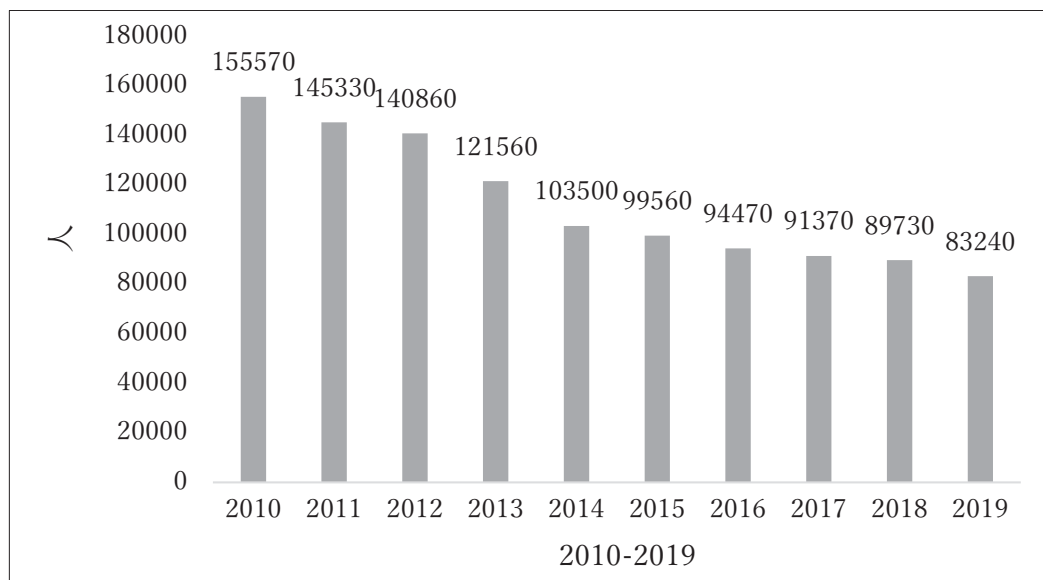
<sup>7</sup> 同上の8頁より引用

<sup>8</sup> 同上の7－8頁より引用

<sup>9</sup> 同上の11頁より引用

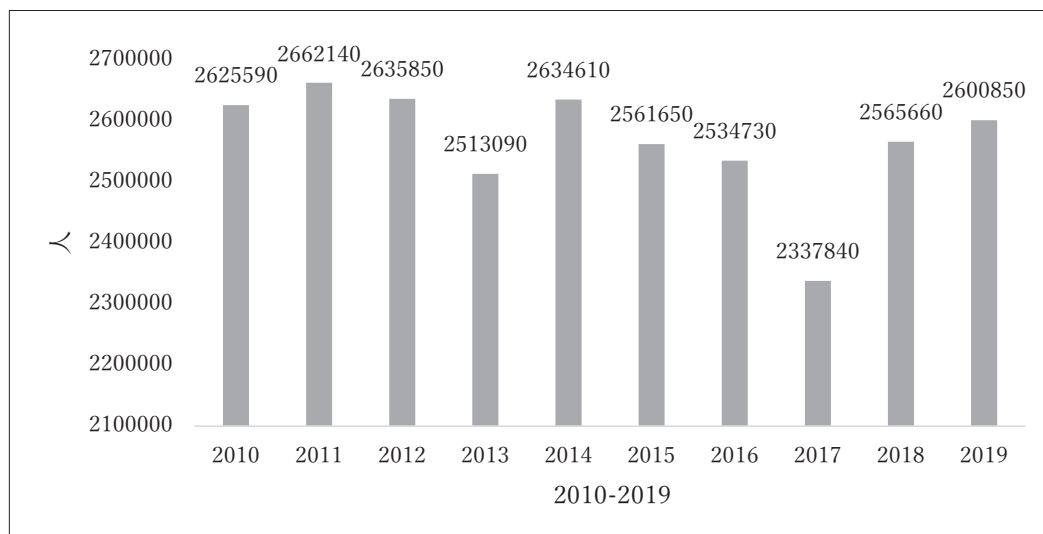
<sup>10</sup> 2021年3月の弥彦村第6次総合計画、101頁より引用

表1. 年間宿泊客数（2010－2019）弥彦村のデータに基づき作成



一方、観光入込客数は2019年にランドオープンしたおもてなし広場の好影響により、順調に伸びている（表2）。

表2. 年間観光客数（2010－2019）弥彦村のデータに基づき作成



そこで、本計画に、弥彦村は観光入込客数を5年間で10万人増加させ維持することと宿泊者数を増加に転じさせることに重点を置き、主要施策として以下に取り組むと基本方針に定めている。

表 3. 施策目標 弥彦村のデータに基づき作成

項 目	基 準 値	目 標 値 (2025年)
新潟県観光動態調査における年間観光入込客数	260万人 (2019年度実績)	270万人

主要施策として、①県外・国外からの誘客を強化、②弥彦温泉及び温泉旅館の魅力度 up と③観光客の安全確保を挙げた。

具体的に、①県外・国外からの誘客を強化について、観光客を直接宿泊に結びつけるため、遠方へのプロモーションを強化し、県外からの誘客に力を入れる。本プロモーションにはデジタルツールを有効活用し、効率的・効果的に弥彦観光のPRを行う。また将来的なインバウンド観光客の誘客も視野に、多言語に対応した神社参拝&まちあるき案内ウェブサービスを整備し、観光客受け入れ態勢整備と観光満足度の向上を同時に実現する<sup>11</sup>。

そして、②弥彦温泉及び温泉旅館の魅力度 up について、①の施策により弥彦村の認知度が向上しても、弥彦温泉の知名度が低かったと同時に、温泉旅館の良さが伝わらなければ宿泊には結び付かない。弥彦温泉観光旅館組合青年部では、この課題に対する草の根活動として、弥彦村の源泉のひとつであり、かつ自身の温泉旅館でも給湯されている「湯神社温泉」を利用した美容ケアの提案と温泉水持ち帰りサービスを複合させた商品「美願の湯」を商品化した。上記の例は民間が実施した弥彦温泉に更なる付加価値を付ける取組の一例であり、今後弥彦村は、このような民間の取組にも協力しながら、引き続き湯神社温泉及び、やひこ桜井郷温泉の有効かつ安定的な供給に努め、弥彦温泉及び温泉旅館の知名度を高めるプロモーション活動を強化し、公民一体として弥彦温泉の魅力度向上に取り組むと述べている<sup>12</sup>。

さらに、③観光客の安全確保について、自然災害や感染症等、観光のマイナス要因が近年多発しているが、弥彦村はこれを逆手にチャンスと捉え、これら災害等のリスクに対し、有効な指針の策定や確実な安全対策の準備を行い、いつ何時観光客にリスクが降り注いだとしても、観光客の安全が確保できるよう万全な体制を整えていく。そして、弥彦村は安全な観光地であることを強くPRし、不安定な時代にあってもより多くの観光客に選ばれる観光地としての地位を確立すると記載されている<sup>13</sup>。

<sup>11</sup> 2021年3月の弥彦村第6次総合計画、108頁

<sup>12</sup> 同上、109頁

<sup>13</sup> 同上、110頁

## Ⅱ. 事業の背景

### 1. 事業の目的

本事業の目的は以下にある：

- ①新潟経営大学が協力し、弥彦村にインバウンド観光に向けた資産があるかを把握する。
- ②インバウンドを推進するためのハード面の課題、ソフト面の課題をあげていく。
- ③外国人による弥彦観光資源の発掘
- ④弥彦観光資源の情報発信を行う。

### 2. 業務内容と現地調査実施日程

- ①本業務を遂行するため、先ず、2016年8月9日（火曜日）はバロリと観光経営学部の学生3名が現地の下見と打合せが行った。まち歩きコースの作成と調査実施日程について様々な意見交換が行った。
- ②2016年9月23日（金曜日）、10時～第1回目の現地調査を実施した。午前の部と午後の部に分けて行う予定だったが、午後は雨で中止すると決断した。そして、午後は商工会所内で意見交換を行い、次回の日程について話し合った。
- ③2016年10月28日（金曜日）、10時30分～第2回目の現地調査を実施した。午後は学生諸君に自由時間を与えて、弥彦神社や弥彦競輪場、弥彦公園などで観光と観察した。

### 3. 現地調査の背景

- ①2016年8月9日（火曜日）、現場下見と打ち合わせ背景



②2016年9月23日（金曜日）、10時～第1回目の現地調査背景



③2016年10月28日（金曜日）、10時30分～第2回目の現地調査背景



#### 4. 事業実施体制

本事業を遂行するため、本学の留学生（計：4名）と本学部の日本人学生（計：6名）のチームワークを設置した。



(参加者名簿)

日本人学生：安達 友理、兼田 有梨、本田 萌実、中村 航、笹田 倫子  
外国人留学生：劉 鯤鵬（リュウ クンペン・中国）、Antonov Ignat（アントノフ イグナート・ロシア）、Zaxor Tatyana（ザクソル タチアナ・ロシア）、兄（ジン・台湾）

### Ⅲ. 調査結果のまとめ

調査目的は、日本人学生と外国人学生の視点で見た、弥彦村の魅力ある資源の抽出、文化と歴史遺産の魅力を掘り起こすことである。

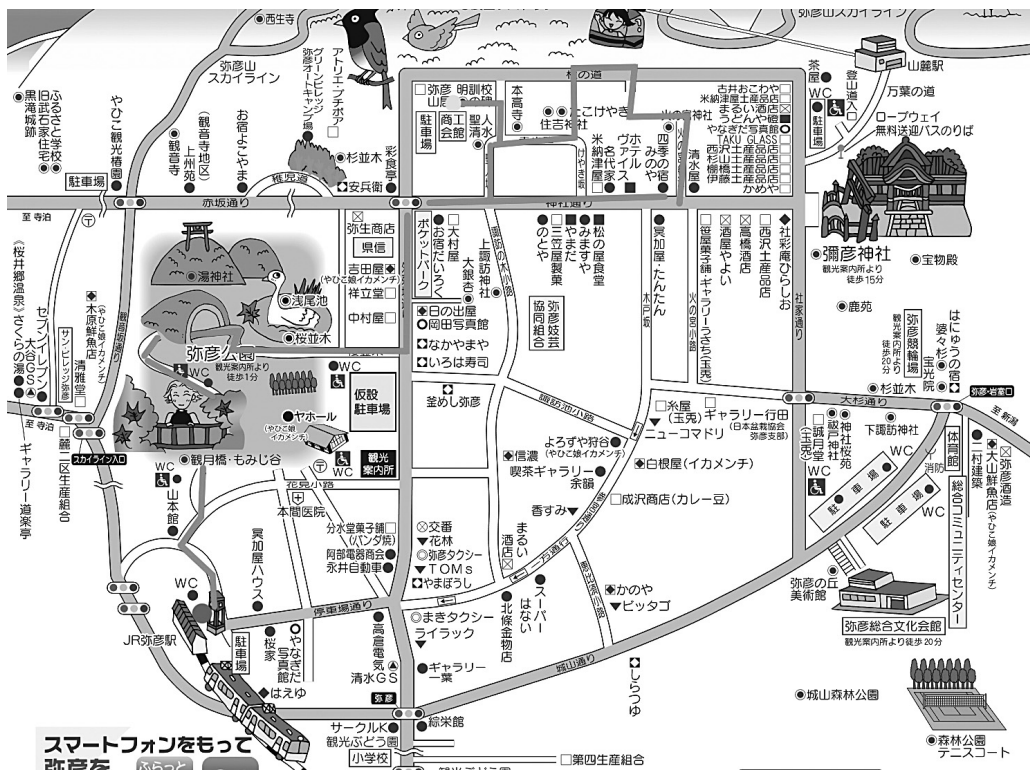
これから以下は、日本人学生と外国人留学生が調査結果をまとめたものになる。

#### 1. 日本人学生（安達 友理、兼田 有梨、本田 萌実、中村 航、笹田 倫子）

第1回目のまち歩き調査結果。

第1回目は、2016年9月23日金曜日の10時から16時に実施した。午前中は電車を利用して訪れる観光客を想定して、弥彦駅から出発した。まち歩きのルートは、初めに弥彦駅を出発して弥彦公園に向かった。景色を楽しみながらトンネルを抜けて進み、聖人清水、二宮金次郎、住吉神社に行き、たこケヤキに進んだ。そして火の宮神社、杉本さんの人形の郷で交流した。午後からは、車で訪れることを想定して、弥彦神社わきにある駐車場からの出発という予定であったが、大雨のため中止となった。

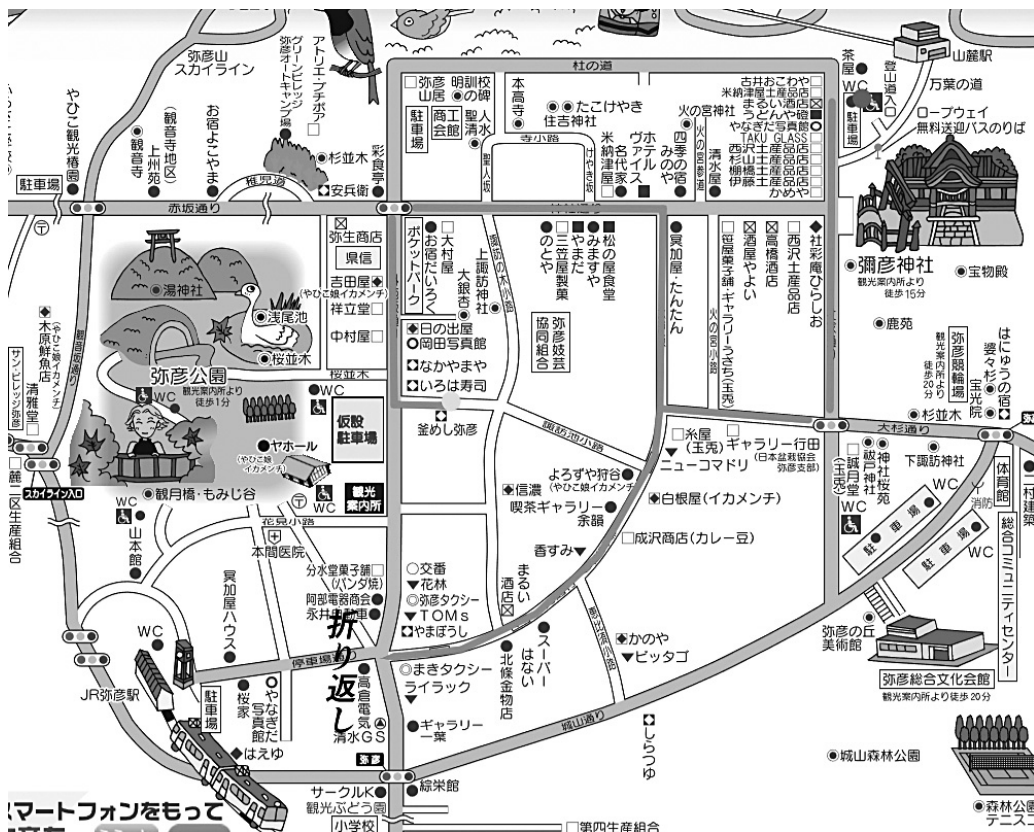
1 回目のルート



第2回目のまち歩きは10月28日金曜日の11時から16時に実施した。午前中は前回歩くことのできなかつたルートを調査した。ルートは弥彦神社を出発し、玉兎の糸屋さん、白根屋さんでイカメンチをいただき、成沢商店さん。その後、岩倉具視右大臣が宿泊した、旧鈴木健宮司郎を改装した、喫茶ギャラリー「余韻」、まるい酒店の前を通り、駅前通りに出た。その後杉本さんの人形の郷へ午前中の分を終了した。

午後からは学生たち各自、自由行動で弥彦公園の紅葉を楽しんだり、パンダ焼きを食べたり観光案内所を訪れた。

2回目のルート



第1回目と第2回目の調査より、発見した課題と可能性を以下に取り上げた。最初は課題について述べていく。

1. 駅前の大きな地図には「歩いて何分」という表記がなかったので、名所のところだけでも書いてあると便利ではないか。
2. 弥彦公園内の道を示す看板に英語表記がないため、外国人観光客が公園内で迷った時にどの方向に行けば、目的地にたどりつくのか分からない可能性がある。
3. 駅を出て弥彦公園に向かう途中にある、祭事の日程について書かれた看板が目立たない。
4. 細い道に入らないと見られないスポットもあるが、案内表示が目立たないため個人で観光した時たどり着ける自信が無い。
5. 私たちが訪れた日が、平日だったせいもあるかもしれないが、観光地を目指している割に閑散としていた。

6. 私たちが村を調査している間、やひこ太郎を見かけなかったが村内でさらにアピールしてもいいと感じた。
7. 弥彦公園を普段から地元の人が通る道にする。（そもそも、人口が少なく活気を出したくても出せないのではないかと思った）

次に、観光スポットとしての可能性を感じた点を述べていく。

1. 私たちが行ったお食事処では弥彦産の米を使っていたので、弥彦でしか味わえない特別感を感じられて、良かった。
2. たこけやきや、聖人清水（しょうにんしみず）は、あまり整備されていないからこその趣があり、歴史を感じられたため、新たな観光スポットとしての可能性を感じた。
3. 調査として改めて訪れた弥彦公園、もみじ谷は四季折々の自然を感じられた。
4. 火の宮神社（ひのみやじんじゃ）は、旅館の間に挟まれていて、入り組んだ場所にあったことが特別な雰囲気を出していた。
5. 駅前の地図が大きく、見つけやすかった。
6. みのやさんの外にある、足湯を利用したお客さんのために、タオルを提供してくれるおもてなしは素晴らしかった。
7. つい駅を背景に写真を撮りたくなってしまうような弥彦駅のデザイン。
8. 駅から弥彦神社へ向かう道には、おいしそうなお饅頭の匂い、杉本さんの人形の郷（ごう）の前においてある人形や、吸い込まれるように入ってみたくなる細道などがある。
9. 村全体を通して弥彦むすめ（枝豆）を使った商品が多く枝豆が特産品だとわかりやすかった。
10. 商店街の流れの無料休憩所では、お店の方の雰囲気が明るく、観光客を快く迎えられる場所だった。観光客と地元の人が交流できる貴重な場所だと感じた。
11. 見知らぬ人からでも、挨拶をしてもらった。

弥彦村には、弥彦神社、温泉、公園などの有名な観光資源が多くあり、県内外からの観光客が多く訪れる。しかし、これからさらに弥彦村の観光という分野を盛り上げていくためには、資源の発見と再認識が必要不可欠である。

今回の調査では、弥彦神社以外のたくさんの観光スポットを見て回った。その中には有名な観光スポットである神社や山に行くだけでは見つけられないような場所

もたくさんあった。分かりやすい看板やパンフレットなどを、もっと設置することで観光に来たお客さんも様々な場所を歩いて、お食事処や甘味処に入って休憩をしつつ、ゆっくり楽しめると考えられる。弥彦神社だけでなく弥彦村で遊ぶことを目的としてもらい、短時間ではなく長時間観光（長期滞在観光型）できる場所になることができると感じた。

村の住民が弥彦村を好きになってあげれば、村をアピールしていくエネルギーも大きくなるのが大前提である。弥彦村に住んでいるとあたりまえで観光スポットではないと思っているものも、弥彦を知らない観光客にとっては、観光資源になると間違いない。新たな観光資源を繰り返し、発見していくことがこれから弥彦村にとって必要なことだと考えられる。

## 2. 外国人留学生

- ① (Antonov Ignat (アントノフ イグナート・ロシア)、Zaxor Tatyana (ザクソル タチアナ・ロシア))

### 第1回 弥彦村観光資源や資産に関する評価

弥彦村に着いたところに、急に目にとめることになったのは弥彦駅であった。理由とは、駅の古典的なデザインが、こちらに初めて見た「足洗い場」。山登道のため必要であるが、新潟市とか東京都みたいの場所へ向かうと、そういうものを見たことがない。

次に、コースによって、グループは弥彦公園へ出発するつもりだが、駅を出て左に公園があると示す観光客のための道標がなかった。でも、1-2分かけても、街歩きの地図が目に入った。残念ながら、英語で記載されていなかったため日本語が読めないあるいはガイドに連れていない外国人観光客が最初に迷ってしまう可能性がある。

次のポイントになったのは弥彦公園であった。公園の入り口に相撲力士の記念碑と挨拶の言葉があったが、自分で読みにくい漢字を理解出来なくて、意味が分からなかった。記念碑の隣に英語で書いた看板を置いた方がいいと思った。公園の中に、気に入った、素敵な安心の雰囲気を生れさせる場所にトンネル、観月橋、と石薬師だった。

そろそろ進んでいてグループは気にするはず所まで到着した。本高寺住吉神社が立ってある場所である。古い像と数百年以上に生える木、そして、有名な日本の仏教と神道の調和を表す寺と神社は伝統と歴史を心底から感じさせている。神社通り

に出て、思わずに人が大勢いる暖かいおもてなしに会うことに驚いた。特に、「四季の宿のみや」からタオルをあげるように出た女と「人形の郷」の楽観的なおばあさんだった。

コースを終えて、もう一つのことがはっきりと分かるようになった。弥彦村に興味を持つ、魅力を感じる多数の場所があるけど、観光客はそこまでたどり着かないと考えている。なぜかというと、加茂市を例として利用すれば、駅に到着して周りに加茂山古道のプロが撮った写真が表示され、駅を出たところに、加茂山公園への英語と日本語で書かれている大きな道標が立っている。それに従って、お客さんが提灯と手作りの物で飾った駅前通りを渡している。弥彦村は伝統的な建物と季節によって変わる、素敵な景色を兼ねている。でも、街歩きを便利にする道具があまりなかったの、改善するべきだと思う。

## 第2回 弥彦村観光資源や資産に関する評価

まち歩きをしながら、皆はよく洋風デザインに従って構った建物に見つけたが、私たちにとって、一番印象に残ったのは紅葉塗れの売店だった。もう一つは只今改築中の茶道所である。なぜかというと、そちらが弥彦村ならではの歴史的な雰囲気を持つ所の一つだからである。コースを続いて、「人形の郷」という看板が付いている店に近づき、一目に見ると、あまり特徴のない所だが、中に入ると、手間暇がかかった、美しい人形の小世界に目を奪われてしまう。日本の普通な村人をはじめ、伝説の勇夫、輝夜姫などのとても楽観的で優しいガイドのおばあさんに見せてくれた人形に会うことが非常に面白くて、魅力があると感じた。

②外国人留学生 劉 鯤鵬（リュウ クンペン・中国）、兄（ジン・台湾）

### 全体的な感想

まず、この町には歴史遺跡が多くあるが、観光客とくに外国観光客に対してインパクトを強く残させるのは極めて難しい。なぜなら、欧米人は東洋文化を有する日本の文化や歴史をほぼ知られていない。興味がない限り、弥彦村へ行こうとする気持ちが沸き上がらない。日本人にとっても同じである。すなわち、日本人だとしても自分の国の歴史と文化を知っていない限り、歴史遺産、遺跡へ行く興味も全くないのである。つまり、歴史資源があったとしても観光地として人目を引き付けられるか否かを疑問とする。

次に、この町には、周りの住居環境がすごく優れている。空気が清くて気持ちを

落ち着けさせることができる。汚染や騒音がなかった。自然環境を守るために工業工場を建てず、流通業や卸売業を開設するしかない。

### 観光地としての感想

- ・バスや自転車がないので、体力が弱い観光者や老人に対して非常に不便だと思う。確かに坂があって道も狭いので、バスが通れないかもしれないし、自転車に乗っても坂をのぼってつらい。しかしながら、仮にバスが通り抜けられないことなら、車も通れないのは当然であると考えられる。そうすると、老人、体力が弱い人、身体障害者の三つ種類の観光者を止めさせることと等しい。彼らはたとえ本気に観光資源を見たくても安全性や不便な状況を考えて上で、諦めることとするしかない。
- ・便利な場所だとしたら、やはり靴洗い場と公園である。靴洗い場は言うまでもなく、観光者にとってそれが大好きである。非常に便利だと考えられる。公園は恋人とか、付き合っている男女とか、夫婦とかに対して理想的なデートや散歩の場所であって、観光者に静かな雰囲気を感じさせる。
- ・弥彦村には、定年後の生活を家族と暮らしたい人々にとっては適切な場所だと思う。もし、ここで老人生活を暮したら静かに暮らせるはずである。

### 問題点

- ・寺、神社の数が多。これは世俗的な人間に対して特別な問題ではないが、宗教を信じる人間に対しては重要な問題である。とりわけ、欧米人やキリスト教、イスラム教の信者たちには、神社や寺へ観光に行くコースを受け入れられるか否かが注目されている。
- ・バスと自転車を置いていない問題である。上記にすでに述べたので、ここで省略する。
- ・観光者における統計データが詳しく知らない。たとえば、若者と老人との比例、外国人の比例、県内からの観光者と県外からの観光者との比例、これがわからないと詳しい提案ができない恐れがある。
- ・弥彦村の財政状態。自然環境を維持するためにお金がかかるはずなのに、8000人口を有する弥彦村には、それに対する財政支出が問題にならないか。

第二回目は、第一回目と同じく内容であるが、前回に通りかけていなかった道に沿って観光資源を見ながら、感想と課題は以下になる。

今回に観光資源を見たところ、歴史を感じる場所は一カ所のみである。それは、岩倉具視の宿泊の邸宅である。但し、私たちは邸宅開館の時間外に到着したので、中身を見ていなかった。そこで、評判が出せないということである。周りの環境と似合わないことを感じた。歴史遺跡の周りに現代の建物が存在しているのは、観光客に歴史の雰囲気を感じさせることが若干弱いと思う。

## 問題点

今回の問題点は、車を運転してきた観光客が数多かったのである。徒歩で観光資源をじっくりと見ようとする観光客に対して非常に妨げると思う。なぜなら、歴史遺跡とお土産の店を集中的に探している最中に、車が遠くのところから次第に近づけてきて、車を避けるためにやむを得ず行動を中断しなければならない。したがって、非常に興味を持っている観光客は観光行動を迫られて中断するのが嫌がることなら、評判を低く出してしまうかもしれない。

ちなみに、現地のお土産の店の看板について目立たない。ざっくり見るとお店の建物か住民の自宅かはっきりとわからない。観光客の目を惹き付けることは実に難しいと思う。

## IV. 弥彦村の観光振興のために

弥彦村の概要に述べたように、弥彦村が抱える課題としては弥彦温泉旅館の宿泊客数が減少傾向である。弥彦村第6次総合計画書（弥彦村 2021）によると弥彦村の年間宿泊客数は平成22年度から平成31年度にかけて約7万人も減少しており、前まで20軒程あった宿泊施設が現在では10軒程度しか残っていない。弥彦村地域の宿泊産業を持続していくためにも観光振興を推進させ、宿泊客数の増加に繋げていくことが求められている。また、高齢化による離農者が年々増加しており、このままいくと弥彦村の農産業が壊滅する可能性が出てきている。弥彦村地域内での食料の供給や農地環境の保全、農業技術の伝承などを維持していくためにも、放棄された農地の受け皿となる新規就農者・担い手の確保や米生産の依存から脱却し枝豆を中心とする高収益作物の生産拡大などを図ることが必要となっている。

### ・地域資源の活用方法

観光まちづくりにおける地域資源の活用方法としては二つのことが挙げられる。

1つ目は地域資源を観光資源として活用することである。地域資源を使って地元



観光の魅力づくりを行うとき、農業、文化・芸術の活用、遊休資産・古民家、歴史まちづくりの整備の活用、道の駅の活用、公園の活用など幅広い資源の活用方法がある。

2つ目は地元にある観光地の活用。地域内に元から知名度が高く人気がある観光地があれば、観光資源として存分に活用していくべきである。例として、弥彦村は弥彦神社などの観光地を活用したイベントとして「弥彦菊まつり」を実施しており、越後一宮彌彦神社境内を舞台とした菊花の大展覧会は秋の越後路の風物詩として人々から親しまれている。したがって、地元の人気観光地からさらに踏み込んだ活用方法を見出だせば新たな観光事業を生み出すことが可能であると考えられる。

### ・多くの人との連携構築

地域活性化や観光まちづくりなどを進めていくため、多くの人との連携として5つのことが述べられる。

1つ目は地域の様々な企業や団体が連携し、地域全体の資源や魅力などの情報を共有すること。地域活性化や観光まちづくりを進めていく際、それぞれの資源を保有する企業・団体が各々で取り組んでいくのではなく、行政を中心に地域全体の資源が連携することが大切と考える。全体が協力することで、地域の強みや足りないところを全体で情報共有ができ、同じ目標に対して様々な分野から見た、違う角度の考えや、提案を得ることができる。

2つ目は人と人を繋ぐ人的ネットワークの構築。活動を円滑に進めていくには直接的な交流やSNSなどのやり取りを通じて独自の人的ネットワークを形成することも大切である。例えば、みのやの白崎さんはSNSなどを通じて人脈を広げており、多くの人々と協力しながら情報発信を行っている。このように、今まで培ってきた人的ネットワークを活かせば、目標に向けて効果的に活動を進めることができる。

3つ目は地域住民からの理解と信頼を得ること。地域活性化や観光まちづくりを行う上では地域全体が一丸となることが大切であり、そのためにも地域住民からの理解を得ることは必要不可欠である。ゆえに、事業目標を明確に伝えたり、説明会を実施するなどして地域住民からの理解を得つつ民間との信頼関係を築くことが必要である。

4つ目はコミュニティ広場を設けることである。地元地域に人々が気軽に交流し合えるコミュニティ空間を作ることによって、コミュニティ内での交流の積み重ねを通じて地元住民を中心とした地域コミュニティの形成に繋げていく。地域内で

しっかりとした地域コミュニティを確立できれば、地域活性化や観光まちづくりによる地域全体での動きにも対応しやすくなるだろう。

5つ目は将来の担い手の育成である。地域活性化や観光まちづくりを継続していくためには地域住民や企業との連携だけではなく、人材育成に向けての職人やリーダー人材の育成も重要であると考え。将来において地域で活躍する担い手を育てていくことは、想いや技術などの継承というカタチで地域を持続可能なものとして繋げていけると思われる。

### 観光まちづくりについての提案

観光まちづくりについての提案として3つのことが挙げられる。

1つ目はコラボ企画による観光客の誘致である。現在、日本国内で人気を博しているコンテンツとコラボレーションを行うことによって、特定のターゲットを地域に呼び込んでいく。例えば、弥彦村だったら弥彦神社を利用して人気アニメなどとのコラボレーションをし、旅館にも人を呼び込む（旅館も何かコラボする）ことができるだろう。

2つ目は在住の外国人留学生を活用したインバウンド向けの商品造成・海外PRの支援体制の構築である。地域の在住者であると同時に外国人の目線を持った留学生を多面的に活用し、外国人目線での動画・SNSを用いた情報発信に仕組みづくり及び旅行商品の開発によって、外国人のインバウンドに繋げていく。

3つ目はゴミのポイ捨ての防止である。観光まちづくりを推進していく上で懸念されるのは観光客のゴミのポイ捨てによって町の景観が破壊されることである。観光公害の発生を食い止めるためにも、チラシや看板で注意喚起したり、ゴミ箱の設置数を増やすなどゴミのポイ捨てを抑制するような環境づくりを取り組むべきだと考える。

地域社会が主体になり、ボトムアップが実行されている地域には、魅力をアピールするリーダーシップのある人とその人を支える団体が存在しているということだ。ボトムアップには、風通しの良い環境、つまり上に立つ人が積極的に現場の人や地域の人々の声に耳を傾け、合意形成を図るために動ける環境が必要である。地域が主体になるべきまちづくりには、こうしたい、こうなりたいという様々な人の気持ちがあふれている。その気持ちを受け止め、実行に移すのは、国は市町村といった規模で動かすのは難しい。

日本は過去に何度も市町村の合併を繰り返し、その自治体が治める範囲が広くなりすぎてしまった。同じような環境で同じような土地に住む人々が主体的に協同で

動かなければ、各地域に適したまちづくりはできない。そこで、地域をよくしたいと考えるリーダーとそれを支える人が必要になってくる。お話を伺った方々と参考資料を通して見た地域は、共通して、リーダーと支える人がいた。できる範囲で地域をまとめ、より住みやすく、より人が来てくれるように試行錯誤しながら各地域のまちづくりが行われているのだ。このことから、まちづくりに必要なのはリーダーシップのある人材とそれを支える人材である。そして、風通しの良いボトムアップが実行できる環境である。これらが最低限備わっていなければ、地域資源を活用し、交流を促進して、町の魅力や活力を高めることはできないことが事実である。

注釈：本章の一部は2021年12月11日に実施した弥彦・三条バスツアーの学生たちが取りまとめたレポートから引用している。

最後に、弥彦観光のコンセプト再構築のため、観光地として弥彦村の資源を磨き上げ、見える化の強化、通過型から滞在型観光地への脱皮リピーター客増加に向けた取り組みの強化のため

- ①地域にある物を活かさきれていないためフル活用する
  - ②行政だけ頼らないで、できるだけ少ない費用で実行する
  - ③地域住民が一体になって地域市民の力でやる
- を再確認をし、コンセプト再構築の取組につなげていく必要である。

## 謝辞

本研究は、2017年度伴走型小規模事業者支援推進事業の依頼を受けた補助事業を取りまとめたものである。弥彦村商工会の皆様にご多大なるご協力をいただいた。この場をお借りし深く感謝の意を表します。

## 参考資料と参考 URL

- ・2015年10月の弥彦村総合戦略、[https://www.vill.yahiko.niigata.jp/pdf/068/1\\_senryaku.pdf](https://www.vill.yahiko.niigata.jp/pdf/068/1_senryaku.pdf)、2022年05月30日閲覧
- ・弥彦村第6次総合計画案、[https://www.vill.yahiko.niigata.jp/wp-content/uploads/210222\\_sogokeikaku6.pdf](https://www.vill.yahiko.niigata.jp/wp-content/uploads/210222_sogokeikaku6.pdf)、2022年05月19日閲覧
- ・地方創生図鑑、新潟県弥彦村 | 地方創生図鑑 (chihousousei-zukan.go.jp)、2022年05月26日閲覧
- ・Gata Chira 「【白崎純也さん 弥彦温泉『四季の宿みのや』代表取締役社長】地域活性化の中心となり弥彦の温泉街を盛り上げたい」<https://gatachira.com/local/6560/>、2022年04月

12日閲覧

- ・ TREE <http://tree-sanjo.com/yattemiyou/>、三条市「中心市街地拠点施設」『TREE』、2022年05月26日閲覧
- ・ 新潟観光ナビ「弥彦菊まつり」<https://niigata-kankou.or.jp/event/2258>、2022年04月29日閲覧
- ・ 観光庁「令和2年度重点支援 DMO 取組事例[2]」<https://www.mlit.go.jp/kankocho/shisaku/kankochi/content/001422935.pdf>
- ・ TURNS <https://turns.jp/> 2022年05月22日閲覧
- ・ 観光地域づくり事例集～グッドプラクティス2018～「災害からの観光振興」<https://www.mlit.go.jp/common/001237083.pdf>、2022年05月24日閲覧
- ・ 日本総研、経営コラム、地方創生のための観光まちづくり（1）眠れる宝の発掘2015年03月02日小林味愛、(<https://www.jri.co.jp/page.jsp?id=26319>)、2022年5月15日閲覧
- ・ 内閣府地方創生推進事務局、稼げるまちづくり取組事例集「地域のチャレンジ100」p. 18【和歌山県和歌山市】リノベーションまちづくりによる若者の担い手育成と大学誘致による賑わいづくり、([https://www.chisou.go.jp/tiiki/seisaku\\_package/siryou\\_pdf/siryou\\_n3.pdf](https://www.chisou.go.jp/tiiki/seisaku_package/siryou_pdf/siryou_n3.pdf))、2022年5月26日閲覧
- ・ Note, ここがすごい！高校魅力化による地方創生3つの事例、(<https://note.com/otosyoku/n/nd2e9bc2a8de0>)、2022年04月19日閲覧
- ・ 国土交通省観光庁、観光地域づくり事例集～グッドプラクティス2018～、(<https://www.mlit.go.jp/kankocho/shisaku/kankochi/ikiiki.html>)、2022年04月18日閲覧